乗客のゐぬバス二台が停まりゐる散りさうで散らぬ桜の下に　加利川友子

満開の桜をうたった歌として独特の味わい。静かである。時間が止まっている感じ。こういう桜の歌は珍しい。

色刷りの名刺が置かれ留守中に虹がかかったらしいと知れる　武藤義哉

虹が訪ねて来て色刷りの名詞を置いて帰ったのでないか、というアイディアである。思い切った擬人法を採用したメルヘンチックな作と読むか、作りすぎの失敗作と読むか、意見の分かれるところ。

人の死を空想する悪辣、レビレートは切なく甘美に聞こゆ　真田裕子

毒とか悪の味わいを加味した男女の関係をうたう一連中の一首。このままでは登場人物が一人なので、上句やストレートすぎるかもしれない。「悪辣を共有す」とでもして、登場人物を二人にした方が、小説的な味わいがでると思うが、いかが。

みなそこの春をあなぐるカモの首忍ぶる恋のひょいと顔だす　屋良健一郎

「みなそこの春をあなぐるカモの首」までが、「忍ぶる恋」を起こす序詞と読むのだろう。「あなぐる」（探す、さぐるの意味）という古語を使ったのはいいが、遊び心が前面に出すぎた点は不賛成。

胎内で育まれ来し時間（とき）刻む　みどりごのほそき皺深きゆび　山口明子

産まれてすぐ、この世に生まれ出たことに本人はまだ気付いていないような、本当に産まれたばかりの赤ちゃんをうたった一首。しわしわの指を見つめている母親が目に浮かぶ。

制服を着る子の指先定まらず桃の徽章がころんと笑ふ　児島昌恵

小学校に入学したばかりの少年。制服が上手に着られないのである。「ころんと笑ふ」は桃の形の丸い襟章が揺れているのだろう。一般の人はよく分からないだろうが、私には分かる。

というのは、私は小学校から高校まで、桃の徽章のついた制服を着て学校に通ったからだ。少年は私の後輩。成蹊小学校に入学したのだろう。ちなみに、徽章の由来は、『史記』の「桃李不言下自成蹊」（桃李もの言わざれど、下おのずから蹊（小道）を成す）という一節にちなんでいる。

有名な人もそうでもない人もサインこれでもかと貼られあり　久松洋一

壁びっしりのサイン入り色紙。どこだろうか。飲み屋かラーメン屋を思い起こす。内容とマッチした茶化したような文体の工夫に注目。